

ラオス健康科学大学臨床検査学部との部局間協定締結について

大崎 博之*

はじめに

神戸大学では、従来から海外の大学・研究機関との国際交流を積極的に行っており、2020年5月の段階で、63カ国の372大学・研究機関と学術交流協定を締結している。特に、神戸大学の医学部保健学科・大学院保健学研究科においては、「ASEAN諸国との連携・協働による次世代保健学グローバルリーダーの育成」をテーマとして掲げ国際交流に取り組んできた。しかし、上記テーマは主に看護やリハビリ、国際保健の専攻・領域を中心に行われており、臨床検査の専攻・領域が中心になっている取り組みは皆無であった。そこで、筆者は以前より交流のあったラオス健康科学大学臨床検査学部との部局間協定を提案し、無事に締結できたので報告する。

I. ラオス健康科学大学との出会い

私が前任校で勤務していた頃、ある男子学生が入学時の自己紹介で、「将来、発展途上で医療支援をしたい」という抱負を語っていた。そのことを覚えていた筆者は、学内実習で彼と再会した際に、「発展途上で医療支援をしたいのであれば、時間のある学生時代に実際に現地を見学してきてはどうか」と提案したところ、「ぜひ行きたい」との答えが返ってきた。そこで当時、NPO法人ISAPH (International Support and Partnership for Health) 現地事務所に所属し、ラオスで医療支援

活動を行っていた椋清美先生(現山陽女子短期大学准教授)に彼を紹介したところ、見学受け入れを快諾してもらった。さらに、夏休みに東京医科歯科大学の沢辺元司先生の引率によるスタディツアーの受け入れを行うので、それに筆者も含めて同行してはどうかとの提案をもらった。

東京医科歯科大学と前任校の合同ラオススタディツアーは2013年と2015年の計2回実施したが、それによりラオスの医療状況がある程度把握することができた(写真1、2)。特に臨床検査に関しては、首都ビエンチャンの国立病院などには各国から支援された自動分析装置などもあり、ある程度の臨床検査が実施されていたが、地方では血液塗抹標本によるマラリアの検査が実施されているのみであった(写真3)。また、ラオス国内で唯一の医療系国立大学であるラオス健康科学大学医学部病理学講座では、アルコールやキシレンの慢性的な不足と不安定な電力供給体制により、日本から提供された自動包埋装置が使用できず廊下に放置されていた(写真4)。このことから、医療支援は支援される側の状況とニーズを十分に把握したうえで行う必要があることを痛感した。

II. 部局間協定について

上述のごとく、神戸大学の保健学科・保健学研究科における国際交流事業は、看護とリハビリ、国際保健の専攻・領域を中心に行われており、臨床検査の専攻・領域での取り組みがなされてい

* 神戸大学大学院 保健学研究科 病態解析学領域 ohsaki@people.kobe-u.ac.jp



写真1 ラオス健康科学大学臨床検査学部での会議



写真2 無医村での保健指導視察。前列左から筆者、沢辺先生、椋先生



写真3 地方の群立病院の検査室



写真4 廊下に放置された自動包埋装置

かった。そこで、筆者は以前より交流のあるラオス健康科学大学との協定が結べないかと考え、先方の責任者と何度かメールでやり取りをした結果、先方も協定締結に前向きな姿勢を示してくれたため、2019年8月に現地に出向き直接面談を行った。その際に、大学全体での協定となるとラオスでの手続きが面倒になるため、それぞれの学部間での協定にした方がよいとの提案を先方から受け、その方向で双方が手続きを行うこととした(ラオスは一党独裁の社会主義国家であり、すべてにおいて国の許可が必要となる)。その後、双

方の大学の学部間で正式な書類が作成され、2020年1月に部局間協定が締結された。

無事に部局間協定が締結され、これから交流活動を実施しようと考えていた矢先のコロナ騒ぎで、大学相互の交換留学などはしばらくできそうにない。しかし、共同研究についてはオンラインミーティングや標本の郵送などで実施できることがないか模索中である。そして、この騒ぎが落ち着いた暁には学生の交換留学や共同研究を積極的に行う予定である。

おわりに

本学の保健学科・保健学研究科における海外大学との部局間協定について紹介した。しばらくの間は、学生を直接現地に行かせることは困難であるが、オンラインによる交流や研究ミーティング

などを積極的に実施し、様々な準備を進めたいと考えている。また、今回の部局間協定の締結は、沢辺元司先生と椛 清美先生のご支援・ご指導がなければ実現できなかった。お二人にはこの場を借りて感謝申し上げたい。